

補章

トルコ・ナショナリズムに関する一考察

——代表的研究の解題——

はじめに

近年、国民国家（ネーション・ステート）を最初に生んだヨーロッパで、分離独立や自治要求の動きによって既存の国家枠組みが大きく動揺していることは周知のとおりである。これは、現実には言語や文化における多数派が少数派に同化を強いるかたちで国民形成が行なわれ、さらにそこから少数派に対してさまざまな差別や経済格差がもたらされてきたことを背景に、少数派の不満が、「国民」とは別の政治的アイデンティティーに基づいた政治参加、あるいは既存の国家枠組みの変更を要求するかたちで噴出したものである。このような動きに対して、一民族が一国家をつくり均質な国民を形成するという国民国家形成のプロセスは、かつて資本主義の一定の発展段階で有していた現実的な意味をほぼ失い、したがって現在の国家枠組みは必ずしも絶対的なものではないという認識が徐々に広まりつつある。ヨーロッパではその一方で、域内各国の主権の一部を奪うかたちで統合が模索されている。新しい国家のあり方、端的に言えば均質な国民ではなく、さまざまな集団の存在を認める政治参加の方法を模索するこのような趨勢は、ヨーロッパをモデルに国民国家形成を目指してきた途上国にも影響を与えずにはおかないであろう。

トルコは中東において近代化に成功し、近代的な国民国家として確立した数少ない国のひとつとされている。しかしトルコも、このような国家枠組みの相対化という世界的な潮流から孤立していることは不可能であろう。近年のソ連解体に伴ったトルコ系共和国の独立、あるいはかつてオスマン朝治下にあったユーゴスラビアの解体といった激変する世界情勢のなかで、トルコ人であること、トルコ国民であることの意味をここで問いなおすことは興味深いと思われる。本章ではこのような関心に基づいて、これまで蓄積されたトルコ・ナショナリズム研究から代表的な4つの研究をとりあげ、それぞれがナショナリズムにどのようにアプローチしているかを検討する。このような作業を行なうことによって、トルコにおけるナショナリズム概念をめぐる問題の考察に有用ななんらかの知見を得ることが本章の目的である。

本章でとりあげるのは、バーナード・ルイス (Bernard Lewis)、ニヤズィ・ベルケス (Niyazi Berkes)、新井政美、およびヤコブ・ランドー (Jacob Landau) の4人の研究である。このうち、前2者のルイスおよびベルケスはトルコ近代史研究の草分けであり、初期のナショナリズム研究の成果は彼らに負うところが大きい。彼らの研究は、1950,60年代当時の近代化論の影響を受け、ナショナリズムを国民国家の形成という文脈でとらえるものであった。すなわち、トルコ共和国の建設を導くような思想がナショナリズムとして分析の対象となったのである。彼らの業績をふまえて、実証レベルをより高め、テーマを絞りこんだナショナリズム研究へと研究段階が進んできたわけだが、1970年代以降の近代化論批判や、ナショナリズムへの不信の抬頭といった研究者をとりまく環境の変化は、視点を新たにした研究を登場させることになった。それらのなかで代表的と考えられるのが後2者の新井およびランドーの研究である。新井の研究は、近代化論的なアプローチを批判する立場から、ナショナリズムを国民国家という枠組みから切り離してトルコ人のイデオロギーとしてとらえなおすものである。またランドーの研究は、国民国家のイデオロギーとしてのナショナリズムとは異なる次元で発展する思想として、汎トルコ主義をとりあげるものであった。

このように本章では、4人の研究の分析を通じて、近代化論とその超克というナショナリズム研究の枠組みの変化が明らかにされていく。現在、近代化論的アプローチとそれへの批判というひと組の図式は、歴史研究の分野においても目新しいものではない。本章があえてこのような構成をとったのは、ナショナリズム概念をめぐる問題を考察する際に、国民国家の位置づけ方に関連して生じてきた研究者のアプローチの変化を押さえることが、避けられない課題であると考えからである。

なお、本章でとりあげる4人の研究はいずれもトルコ語以外の言語（英語・邦語）で著されたものである。トルコ人研究者の自国語による研究は近年、着実に積みあげられてきており、本章の問題関心からすればこれらをも当然とりあげるべきであろう。しかし筆者の語学力が未熟であり時間の制約もあるため、これについては今後の課題に譲りたい。したがって本章では、西洋的な思考・概念を身につけた研究者が近代西洋の経験から生まれた概念であるナショナリズムをどのようにトルコに適用してきたか、ということに分析の対象が絞られている。

第1節 近代化論的アプローチ

1. 初期のトルコ近代史研究

欧米におけるトルコ近代史研究が緒についたのは、冷戦体制下での近代化論の潮流を背景に、中東における近代的な政教分離型の国家形成が成功した例としてトルコへの関心が高まった1950,60年代のことである。この時期のトルコ近代史研究は、概説的・通史的なものが主で、ナショナリズムという個別のテーマを扱う研究は、代表的イデオログであるズィヤ・ギョカल्प（Ziya Gökalp）の思想研究を除いてまだ手をつけられていない状態であったとあってよい。このようなかたちで始められた初期のナショナリズム研究と

しては、バーナード・ルイスの『近代トルコの誕生』(1961年)⁽¹⁾がまずあげられる。本書はトルコ近代史の古典的な研究とされ、そこでのトルコ・ナショナリズムのとらえかたは、当時のトルコ近代史研究者のナショナリズムに対する態度を代表していたといえる。

『近代トルコの誕生』は、第1部がオスマン帝国の衰退と西洋文明の衝撃、専制政治体制下での西洋化改革、革命、共和国の成立を中心に1960年の軍事クーデタまでの歴史、第2部が国民の形成、政治の世俗化など近代国家のメルクマールとされる事項についての検討、という構成をとっている。本書のこうした構成から推察されるように、ルイスはオスマン帝国の後期から共和国初期にかけて行なわれたさまざまな改革の過程を、イスラーム文明から西洋文明への文明の転換、すなわち近代化を本質とする革命であったと考えた⁽²⁾。当時欧米が抱いた、「途上国、特に中東諸国で近代化が皮相なものにとどまっているのはなぜか。唯一トルコが根本的な近代化に成功しつつあるのはなぜか」という疑問に対して、ルイスは、制度上の近代化改革に先立って制度を支える概念・思想が近代化されたためであったと説明する。すなわち、トルコ人はヨーロッパ列強の直接支配下にはおかれなかったため、他の途上国と異なって思想・概念にかかわる西洋的価値(たとえば世俗主義)を強制的に植えつけられることはなかった。むしろこれらの価値を、葛藤のうちにも近代化改革を目指す積極的な意思をもって受け入れ、1923年の共和国革命に先立って概念・思想の近代化を蓄積していた。これが共和国以降の近代化の成功につながったというのである⁽³⁾。

近代化の諸相のうち、イスラーム帝国から近代的国民国家へという国家枠組みの近代化についてもまた同様であった。ルイスによれば、アナトリアに近代国家樹立のための物理的条件が整った段階で人々の政治的アイデンティティーがある程度近代化されていたからこそ、比較的安定した近代国家が確立されたのである。したがって本書においてトルコ・ナショナリズムは、このような近代的なアイデンティティーの発露としてとらえられることになった。国家の近代化という概念と密接に結びついたルイスのトルコ・ナショナ

リズム観は、近代化論が盛んであった当時の、そして場合によっては今日までの一般的な趨勢であるといつてよいだろう。

ルイスは『近代トルコの誕生』の第2部で「共同体と民族」(Community and Nation)という章を割いて、トルコ人のアイデンティティーの近代化をとりあげており、ナショナリズムの問題は主にそこで扱われている。以下、若干紙幅を割くことになるが、この章を中心にトルコ・ナショナリズムの形成の歴史過程を概観してみよう。4人の研究者のナショナリズムへのアプローチを検討するにあたって、まず通説となっているルイスの叙述を、彼のアプローチに留意しつつ押さえることが有益と思われるからである。

2. ルイスの研究：ナショナリズム形成の通説

オスマン帝国において帝国民の政治的地位を決定するのは宗教であった。したがってルイスによれば、トルコ人はまずムスリムとして自己認識し、トルコ語やトルコ文化は政治的な重要性を持つことはなかった。オスマン王朝に対して彼らが抱く忠誠心も、イスラーム帝国の支配者としてのそれに対するものであり、トルコ人王朝としてではなかった。トルコ語を話す帝国の支配エリートの間で、トルコ人意識はきわめて希薄だったのである⁽⁴⁾。

しかし、このような伝統的な政治意識は、圧倒的な軍事力・経済力を誇るヨーロッパ列強に侵食された帝国の再建を期して諸制度の西洋化改革がはかれるのに伴い、徐々に変化していく。特に重要なのは、西洋化改革の一環として設立された近代的な教育機関から、「自由」、「祖国」、「立憲」、「平等」といった西洋の思想を信奉する新しい知識人層、「新オスマン人」(Yeni Osmanlılar)が輩出されたという点である。彼らは、スルタン専制の廃止と立憲政を要求する一方、宗教を軸に亀裂が入った帝国を再建する手段としてフランスおよびイギリスにおけるナショナリズム思想に目を向けた最初の人々であった。オスマン帝国では18世紀末以来、バルカン半島のキリスト教徒臣民が民族意識に目覚め、帝国からの自立を模索しはじめていたが、1821

年以降ギリシア人の独立運動が本格化すると、キリスト教徒の保護を口実にする列強の干渉を受け、キリスト教徒とムスリムの対立が深まっていたのである。彼ら新オスマン人が関心を示した、この2国におけるナショナリズムとは、領域・主権を同じくする人々がネーションとして国家（ネーション・ステート）に対して抱く忠誠心であり、愛国主義思想（パトリオティズム）ともいえる思想であった。新オスマン人たちは、このようなナショナリズムを帝国にあてはめ、宗教の相違に関係なく平等な権利と義務を負うオスマン人という新しい政治的アイデンティティーを人々に浸透させることによって、分断された帝国民を再統合しようと試みたのである。しかし、彼ら自身が伝統的な自己規定を脱しえず、そのオスマン主義は実際の政策ではムスリム優位の政治思想として表れた。これは、当時の帝国内のナショナリズム運動がキリスト教徒対ムスリムという宗教対立のかたちで表れたことから明らかである。結局、非ムスリムをオスマン・ネーションとして帝国につなぎとめようというオスマン主義は失敗に終わることになった⁽⁵⁾。

このようにオスマン主義が失敗する一方、同じ時期には帝国領バルカン半島においてキリスト教徒諸民族のナショナリズム運動があいついで発生した。この動きはトルコ人をトルコ人意識に目覚めさせ、これがトルコ・ナショナリズムの萌芽が形成されていく契機となった。ただし、キリスト教徒諸民族のナショナリズムへのトルコ人の反発は、当初、宗教対立という面が強調された結果、イスラーム共同体（ウンマ）への帰属意識を強化するかたちで表れた。新オスマン人たちも、帝国を統合する文化的な絆としてイスラームを評価したが、スルタンのアブドゥル・ハミト（Abdülhamid）2世は、このようなイスラームへの回帰現象を政策的に利用し、国内外に向けて、列強への対抗とムスリムの団結をうたう汎イスラーム主義をうちだした⁽⁶⁾。その背景には、19世紀後半の露土戦争敗北とバルカン領土の喪失、列強によるチュニジアとエジプトの占領など、あいつぐ政治危機があった。アブドゥル・ハミト2世は、汎イスラーム主義を掲げて専制政治をしき、これによって帝国の維持とスルタン位の強化をはかったのである。彼の専制政治は、1876年の

議會閉鎖と憲法停止から約30年間続くことになった。アブドゥル・ハミト2世のこのような（特に内政の）政治手段としての汎イスラーム主義に反発したのは、いわゆる「青年トルコ人」の名で知られる若い知識人・軍人であった。

「青年トルコ人」は、かつてアブドゥル・ハミト2世の専制強化によって急速に勢力を失った新オスマン人⁽⁷⁾の流れを汲む、近代的な教育機関出身のエリートたちである。彼らは亡命先のヨーロッパを本拠に、スルタンの専制の廃止と立憲政の復活を要求する運動をおこし、活発な出版・宣伝活動を行っていたが、1908年、スルタンに憲法復活を約束させることに成功した。これが「青年トルコ人革命」である。青年トルコ人たちは、帝国の存続をめざす点でオスマン主義であったといえる。しかし、彼らの主張は、かつて新オスマン人が理想としたような全帝国民の融和ではなく、トルコ人第一主義、あるいは帝国民のトルコ化の強制といった響きを持つものであった。この新しい傾向は、帝国民が次々に帝国を離反し、オスマン主義の限界が明らかになっていくなかで、トルコ人がオスマン帝国と「オスマン人」とから切り離された、トルコ人としての政治的アイデンティティーを獲得しはじめたことを示すものであった⁽⁸⁾。

さて、以上のような、帝国内外の政治の発展に伴うトルコ・ナショナリズムの発生は、それまでとは異なる新しいナショナリズム概念の受容とトルコ人意識の確立を背景にしていた。すなわち、かつてオスマン主義者が掲げ、帝国の実態にあわず実現されないままに終わったフランス型のナショナリズムに替わって、新しいタイプのヨーロッパのナショナリズムがトルコ人の関心をとらえはじめていたのである。19世紀に中欧のドイツ人やハンガリー人の中で盛りあがったこの新しいナショナリズムは、主観的な民族アイデンティティーに基づく情緒的な概念であり、エスニック的に混乱した帝国の状況に十分対応できる概念と考えられた。フランス型のナショナリズムが、国民の国家に対する忠誠心であるとすれば、この新しいナショナリズムは、ロマンチックな帰属意識を共有する人々の集団に対する忠誠心であったといえ

る⁽⁹⁾。

そして、この新しいナショナリズム概念の中身となるべきトルコ人意識も、ヨーロッパで盛んであったトルコ学研究の知識を主体にして、19世紀を通じて徐々にその内容を豊かに育まれつつあった。このヨーロッパのトルコ学は、ヨーロッパ人の外交官や留学生、帝国へ往来したトルコ学者により伝えられ、トルコ人にトルコ人としての自覚と誇りを植えつけたのである。こうして新しいナショナリズム概念の器に「知識」が盛られることによって、歴史・言語学者など知識人の間で文化的なトルコ・ナショナリズムが形成されていった。さらに19世紀末から20世紀の初めにかけて、ロシアからタタール人、アゼルバイジャンや中央アジア出身のトルコ系の人々が帝国へ大量に亡命あるいは移住してくると、彼らの汎トルコ思想がトルコ・ナショナリズムに新しい刺激を与えることになった。

当時ロシアでは、帝国政府の汎スラブ主義に反発し、トルコ学や中欧のナショナリズム思想の影響を受けたトルコ系の人々の間でナショナリズム思想が高まっていた。彼らの思想は、ロシア、オスマン帝国、ペルシア、中国にわたる広大な土地に住むトルコ系の人々を、ひとつの国家に統合することを主張する拡張主義的なトルコ主義であった。バルカン地域の領土の喪失や非トルコ人ムスリム（アラブ人、アルバニア人など）の政治的動揺により孤立感を深め、トルコ人意識を確立しつつあったオスマン・トルコ人は、トルコ系の人々の地理的・歴史的な広がりやうたう、この思想の文化的な側面に惹かれていったのである⁽¹⁰⁾。

さて、青年トルコ人革命によってアブドゥル・ハミト2世時代の言論統制が解除されると、イスタンブル（Istanbul）やサロニカ（Salonika）を中心に文化的な汎トルコ主義を主張する出版活動やクラブ活動が活発化する。ロシアから亡命あるいは移住してきたトルコ人が抱く汎トルコ主義は、彼らとオスマン帝国内のトルコ人との政治的連帯を意図していた。青年トルコ人政府は、対ロシア関係の悪化を危惧して、当初はこの考えに冷淡であった。しかし、キリスト教徒に加えて、非トルコ人ムスリムまでが分離独立運動を開始し、

特に、対ロシア開戦(1914年)で上記のような危惧がなくなると、彼らのナショナリズムは汎トルコ主義の政治的な実現をめざす思想に変質していった。この拡張主義的なナショナリズムは、第一次大戦末期の中央アジア侵攻に結びつき、その結果オスマン帝国を破滅に導くことになったのである⁽¹¹⁾。

青年トルコ人たちは、強いトルコ人意識を持ちながらも、政治的にはオスマン帝国維持を優先課題とするオスマン主義者でありつづけた。しかし、第一次大戦の敗北で帝国の滅亡が明らかになると、オスマン主義は意味を失い、彼らには2つのアイデンティティーが残されることになった。それは、ムスリムであり、そしてトルコ人であるという自己規定であった。しかし、この2つのアイデンティティーは、いずれも特定の現実的な国家領域をイメージすることはできず、オスマン主義に代わって新しい国家をつくるための基盤にはなりえなかった⁽¹²⁾。トルコ人の国家とアイデンティティーをめぐるこのような状況が変化するのは、国土解放戦争を経て共和国が誕生し(1923年)、アナトリアと若干のヨーロッパ領土に基づく「トルコ」(Türkiye)という領域概念の成立をみた後である。共和国の成立にあたっては、初代大統領のムスタファ・ケマル(Mustafa Kemal)によって、トルコ人ががちとったトルコという領域に基づく国家の建設が宣言され、汎トルコ主義と汎イスラーム主義は否定された。これは当時の国際環境にあって極めて現実的な判断であったといえる。そして、このような宣言を行なった新生トルコにとって、国家として確立するために必要とされたのは、オスマン帝国末期に浸透していた主観的で情緒的なナショナリズムではなく、フランス型の愛国的なナショナリズムの育成であった。このような愛国的なナショナリズムは、共和国の成立した当初は人々にとって実感のないイデオロギーであった。しかし、オスマン帝国時代に育まれたトルコ人アイデンティティーは、政府のナショナリズム教育によって徐々に新しい国家領域に根ざしたものに転換されていく。中央アジアから長い移動の末にアナトリアに定着して以来、トルコ人は、イスラームとトルコ、そしてアナトリアという3つの要素から彼ら独自のトルコ文明をつくりあげてきた⁽¹³⁾。したがって、このような意識の

転換は、当時の国際環境を生き延びるためだけでなく、トルコ人に、アナトリアこそが彼らの真の故郷であるということを認識させて、彼らの国家に正統性を与えるためにも必要であったのである。

以上に紹介してきたルイスの叙述を要約するならば、次のようになる。トルコ人の伝統的な政治的アイデンティティーはイスラームに規定されていた。政治的にも経済的にも衰退したオスマン帝国を再建するために、ヨーロッパのナショナリズム思想の影響を受けてオスマン主義が生まれた。しかし、彼らが唱えるオスマン主義は結局イスラームという殻を破れず、失敗する。一方、彼らのムスリムとしてのアイデンティティーを専制政治に利用しようというスルタンの汎イスラーム主義は、ヨーロッパ思想に触れたエリートには受け入れられないものであった。このころには非トルコ人臣民の離反があいつぎ、それに伴ってトルコ人意識が先鋭化していく。オスマン主義および汎イスラーム主義の限界への認識と、このようなトルコ人意識の高まりを経て、西洋化志向のエリートを中心にトルコ・ナショナリズムの萌芽が生まれる。ヨーロッパ思想の影響を受けて育まれた、この新しいナショナリズムは、主観的で情緒的な民族規定に基づき、帝国においてトルコ人がおかれた立場にうまく適合する思想であった。しかし、このナショナリズムは第一次大戦下では汎トルコ主義的な色彩をしだいに強め、帝国を滅亡に導く一因となったのである。国土解放戦争を経て成立した新生トルコ共和国は、拡張主義的な汎イスラーム主義や汎トルコ主義を否定し、新しい国家領域を受け入れた。トルコという国土とトルコ人に基づく近代的な国民国家の確立のために、オスマン帝国時代に育まれたトルコ人意識を核にして愛国主義的なナショナリズム思想が形成されていくのである。

このような、トルコ・ナショナリズムの生成と発展に関するルイスの歴史解釈は、通説として位置づけられており、基本的な骨組みは今後も継承されていくであろう。ただし、ルイスは当時盛んであった近代化論の影響を強く受けており、ナショナリズムに対する彼のアプローチにはいくつか批判すべき点もあると思われる。これについては後に詳しく検討することとし、次に、

ルイスと並んで初期のトルコ・ナショナリズム研究に大きく寄与したニヤズィ・ベルケスの研究をとりあげたい。

3. ベルケスの研究

ニヤズィ・ベルケスの『トルコにおける世俗主義の発展』⁽¹⁴⁾は、ルイスと同じく国家・社会の近代化という伝統的なテーマを扱ったものであるが、ルイスが概説的であるのに対し、政治・社会思想の研究に重点がおかれている。

ベルケスの論旨は、中東諸国で唯一トルコが近代化と経済発展に成功した原因は、国家体制など諸制度の近代化に先立って、概念・思想が世俗化されていたことにあったというものである。彼によれば、近代西洋では国家と教会の分離、つまり国家の世俗化の上に近代化と経済発展が可能になったのであり、途上国も近代化と経済発展を遂げるためには国家の世俗化が必要とされる。制度の近代化に先立つ思想と概念の近代化、あるいは物質的近代化に先立つ精神的近代化という彼の考えの枠組みは、ルイスと共通している。ただしベルケスの場合は、イスラーム社会における政教一致体制に注目し、近代的思想・概念が生まれる土台になった世俗主義を分析の切口に選んだところに特徴がある。

彼は、社会基盤の世俗化、つまりイスラーム共同体（ウンマ）の解体とトルコ民族（ネーション）の登場という現象が、トルコ人の主体的な近代化を可能にする土壌を用意したと考え、その意味においてトルコ・ナショナリズムを、トルコ人社会の改革思想と位置づけた。いいかえれば、トルコ人社会に浸透しつつあった民族概念を当時の社会改革をめぐる議論に導入するかたちで形成された思想が、トルコ・ナショナリズムとされるのである。

では、民族の概念は、どのようにしてトルコ人に受け入れられていったのであろうか。ベルケスは、これを以下のように説明する。オスマン朝ではすでに17世紀から軍事技術や教育の西洋化（これはしばしば世俗化を意味した）

改革が開始されていた。これらの諸改革は、徐々に伝統的な諸制度・価値システムを切り崩していったが、その一方で伝統にかわる新しい価値システムはなかなかつくり出されなかった。そのため西洋化は皮相なものにとどまり、根本的な改革はなされないままであった。これは、国家システムの改革についても同様であった。たとえば19世紀前半のギュルハーネ勅令では、宗教を問わず国家の前に平等なオスマン市民として臣民を融合する試みがなされたが、中央集権の強化を恐れる非ムスリム臣民と、国家の世俗化に反対するムスリム臣民の双方からの反発にあって挫折に終わったのである。一方、バルカン戦争（1911～13年）によって非ムスリム臣民の分離独立とそれを操る列強への政治的・宗教的反発がピークを迎えると、ミッレット (millet) 概念は、次第に宗教性を弱めて政治性を獲得していく。すなわち、帝国内ではすでにアラブ人・アルバニア人などトルコ人以外のムスリムが、ムスリムであるという伝統的自己認識の上に宗教性を脱した政治的集団としての意識を獲得し、世俗的な民族 (ネーション) 概念を受容していた。第一次大戦開戦後、彼らがトルコ人支配からの脱却をめざしてナショナリズム運動を本格的に展開すると、ここにトルコ人自身もトルコ民族として自覚するに至ったのであると⁽¹⁵⁾。

ベルケスは、トルコ・ナショナリズムを、政治的な帰属意識が世俗化することによってかたちづくられてきたトルコ民族意識が、トルコ人社会の改革という考えと結びついて生まれた思想であると説明するのである。ベルケスによれば、帝国後期にはトルコ人をとりまく状況の悪化に伴い、知識人の間でトルコ人の政治的・文化的な基盤を求める思想的な活動が高まっていた。この動きは1908年の青年トルコ人革命により自由な言論活動が可能になると、ますます活発になり、3つの異なる思想に収束していった。すなわち西洋化主義、イスラーム主義、およびトルコ主義である。このうちトルコ主義は、ムスリムとしてより、むしろトルコ人として自分達の社会を近代化しようという思想である。そして、このトルコ人の近代化という漠然とした考えを体系化し、ナショナリズム思想のかたちを与えたのがズィヤ・ギョカルプ (1876～1924) であった。ギョカルプは、オスマン帝国末期から共和国成立直後の

死に至るまで、青年トルコ人の指導的イデオログとして活躍した人物である。後述するように、ベルケスのナショナリズムのとらえかたは、まさにこのギョカルプの思想への共鳴によって支えられたものであった。ベルケスは、ギョカルプの思想を次のように紹介している。

ギョカルプは、西洋文明とは、おのおのの文化を基礎に成立したさまざまな国民（ネーション）が国際的（インターナショナル）に共有する文明、つまり西洋に発したものではあるが普遍的に共有されるべき現代文明である、と考えた。この現代文明を受け入れて社会を改革し、ヨーロッパ列強と肩を並べるためには、トルコ人もまず近代的な民族（ネーション）として自らを確立し、西洋の諸民族（ネーション）と同じ出発点に立たねばならない。西洋において民族（ネーション）は、さまざまな文化に対し普遍的な価値を共有させる装置として機能していたキリスト教会と帝国の崩壊から生まれた。これと同様にトルコ文化の担い手としてのトルコ人も、イスラーム共同体（ウンマ）とオスマン帝国が西洋文明の衝撃のもとに崩壊することによって、トルコ民族（ネーション）として再生できる。そうすれば西洋文明を主体的に受容し、トルコ人社会を近代化させることが可能になるだろう⁽¹⁶⁾。このようにベルケスによれば、ギョカルプは国家と宗教組織の分離を近代化の出発点と考えたのである。

ベルケスによれば、ギョカルプらトルコ主義者は、社会改革をめぐる論争において、西洋文明を選択的に受容することでイスラームの価値を守れという穏健派イスラーム主義者の主張に共感した。また同時に彼らは、西洋主義者の西洋文明志向にも同調していた。しかし彼らは、前者が世俗的な民族概念を否定しイスラーム共同体に固執する点で、後者が無批判な西洋の模倣を唱える点で、両者とその立場を決定的に異にしていた。彼らは、ムスリムでも、文化的アイデンティティーを失ったトルコ人でもない、トルコ民族としての自律的な近代化を主張したのである⁽¹⁷⁾。

ギョカルプのナショナリズム思想は、共和国憲法の基本精神に取り入れられ、共和国政治に後々まで大きな影響を持ち続けたとされている。そのため

彼の思想研究は、現在までナショナリズム研究の大きな柱であり⁽¹⁸⁾、ベルケス自身も彼の論説を翻訳し解説を付した『トルコ・ナショナリズムと西洋文明』⁽¹⁹⁾を著している。彼の『トルコにおける世俗主義の発展』は、近代化の基盤が世俗主義思想の発展によってつくられたという観点に立つが、この着想は、近代化の出発点が国家と宗教の分離であるとしたギョカルプの理論から得たものであろう。トルコの近代化をめぐる議論の下敷きにギョカルプの理論を置いているベルケスにとって、トルコ・ナショナリズムとは、トルコ人の近代化思想にはかならないのである。

以上ルイスおよびベルケスの議論を簡単に紹介してきた。次節ではナショナリズムに対する両者のアプローチを整理し、初期のナショナリズム研究における、ナショナリズム概念をめぐる問題を明らかにしたい。

第2節 ルイスとベルケスの視点、およびその限界

前節で見てきたように、ルイスは、トルコにおける近代化をイスラーム文明から西洋文明への文明転換という文脈で理解した。オスマン帝国からトルコ共和国への移行においてトルコ人がたどった歴史は、イスラーム帝国から西洋型国民国家への発展であり、「オスマン人に対するトルコ人の革命」⁽²⁰⁾という表現から明らかなように、「近代」による「伝統」克服の道りであったとされる。ルイスの叙述を特徴づけるのは、伝統的なイスラーム帝国のオスマン王朝と近代的な国民国家のトルコ共和国という対比に表れているように、「イスラームの伝統」と「西洋的近代」との二項対立の図式であり、文明論のレベルで歴史を解釈しようとする近代化論的な発想であるといえよう。近代化論の思想体系（西洋近代の価値・概念・制度の実現を社会の進むべき唯一の目標とする単線的発展をイメージする）においては、西洋以外の諸社会は西洋近代の対局にある「伝統」的なものと位置づけられる。そして、これらの社会は「伝統」という名のもとにひとまとめにされ、それぞれの歩みは自律的な

動きとしてではなく、西洋的価値にどれほど近いかという基準に沿って評価されることになる。このような発想をもってトルコの歴史に向きあうとき、西欧におけるのと同じ意味での民族が生まれ、これが国家をつくり国民になるという過程が共和国成立までの歴史にあらかじめ想定されてしまう。したがって帝国末期のトルコ主義をめぐる一連の議論は、西洋近代の歴史的現象としてのナショナリズムをモデルにしたナショナリズムを模索する試みとして整理されるのである⁽²¹⁾。

一方、ベルケスは、指導的ナショナリストであるギョカルプの思想に基づいて、トルコ人が決して西洋文明の無批判な模倣ではなく、トルコ独自の近代化のあり方を模索していたと考え、トルコ人の目から見たトルコ主義の意味について論じた。彼はこの点でルイスと一線を画しているといえる。しかし彼もまたルイスと同様、「西洋の目」から完全に自由になることはできなかった。というのは、彼は西洋文明の衝撃とそれに対するトルコ人の反応という議論の枠組み（これはルイスにも共通する）を一貫して用いているからである。この枠組みにおいては、トルコ革命は、その原因から目的まで、近代西洋がトルコ人に課した諸問題によってそのあり方を決定されたことになる。ここでは西洋対トルコ人という構図が設定され、西洋文明の衝撃がトルコの歴史の変化の前提条件とされている。そのためトルコ人は、この衝撃に翻弄される受動的な存在としてしか描かれぬ。たとえばトルコ人の党派抗争は、西洋文明の衝撃への対応の違いに還元されて説明されるにとどまり、トルコ人社会内部の論理として説明されることはない。またトルコ人と、キリスト教徒やアラブ人ムスリムの相互関係からなんらかの変化が生じたとしても、これは過小評価されたり西洋文明の衝撃に帰因させられたりすることになると想像される。つまり、ひとつの現象は西洋との関わりの中でしか変化として認められることがない。そのためギョカルプの思想が「現代文明としての西洋文明」の主体的な受容を、つまりトルコ人独自の近代化を唱えていることに注目するにもかかわらず、ベルケスにとってトルコ革命は、結局「西洋の仲間入りをするため、西洋に対抗して行われた革命」⁽²²⁾以上の積極的

な意味を与えられないままなのである。

このような枠組みにおいてナショナリズムは、西洋文明の衝撃による伝統的国家・社会構造の破壊に対して、近代的国家・社会構造を創出するために形成された改革思想としてしか把握されない。前に述べたように、トルコ人は、西洋の影響を受けて変化する存在と見なされているため、彼らのナショナリズムの形成についても西洋の影響がまず考えられ、帝国内部の要因が問題にされることは少ない。ベルケスは、たとえば、バルカンのキリスト教徒諸民族やアラブ人のナショナリズムとの関係を、社会集団概念の世俗化(ミレットから民族へ)への寄与、あるいは反乱を背後で煽る西洋への反発といった側面でとりあげており、これらを、いずれも西洋との関わりにおいて意味づけている。そして、帝国内におけるトルコ人の非トルコ人に対する支配の論理、たとえば中央集権を進めることによる国家支配の強化の問題に、重要性をあまり与えていないのである。

ただしベルケスは、近代西洋とトルコ人の価値をいかに調和させていくべきか、という問題設定でトルコの近代化改革を論じていることからわかるように、西洋近代を近代化の尺度と考えてはいたが、ルイスのような単純な西洋中心主義者ではなかった。彼は、トルコの近代化を牽引するケマル主義体制のエリートのひとりとして、ギョカルプがとりくんだ「西洋的近代とイスラーム＝トルコ」の問題を共有していたと思われる。彼もギョカルプも、トルコ人の自律的な近代化を目指すにもかかわらず、あるいはそれだからこそ、こと国家のあり方に関しては、近代化の出発点として西洋と同じ土俵に立つこと、つまり国民国家の成立を社会改革思想としてのナショナリズムの目標と考えたのではないかと思われる。

さて、以上に見てきたようにルイスとベルケスのアプローチは、ナショナリズムを近代的国民国家としてのトルコ共和国に直結する思想として、いわば閉じられた体系のなかでとらえるというものであった。彼らは国民国家の形成に結びつくようにさまざまな思想を取捨選択してナショナリズムの形成の道筋を描き、国民国家の形成に結びつかなかった、あるいはもっと別の国

家の建設をイメージした思想にはあまり重要性を見いだしていないようである。両者ともロシアからの亡命トルコ人のナショナリズムがオスマン帝国のトルコ人に及ぼした一定の影響を認めつつも、彼ら相互の人的・思想的交流や共和国以後の前者の影響力にあまり注意を払っていない。さらにルイスは、キリスト教徒の同化が困難な一方、ムスリムであるクルド人やアラブ人は、トルコ人社会に迎え入れられ容易に同化されたとして、イスラームに規定された政治的アイデンティティーの残存を指摘するが⁽²³⁾、しかしこれも伝統と近代の二項対立の文脈で語られており、トルコ人以外の人々のナショナリズムとして問題にされているわけではない。ロシア出身のトルコ人の汎トルコ主義思想やクルド人の民族アイデンティティーは、ナショナリズム教育によって克服された、あるいはやがて克服されると考えられ、均質なトルコ国民（ネーション）の形成が自明とされるのである。

1950年代のトルコは政教分離が徹底し、複数政党制の導入により民主化が進展し、また冷戦体制のもと西側諸国から多大な援助を受けて経済が順調に成長するなど、政治的にも経済的にも近代化が進み、名実ともに近代国家として成熟しつつあると見られていた。当時の欧米の楽観的な近代化思想は、途上国近代化の格好のモデルとしてトルコをとりあげ、またトルコの側でも欧米をモデルとする近代性を身につけることに積極的であった。このような政治的・思想的環境のもとでルイスやベルケスをはじめとする歴史研究者は、ムスリムからトルコ民族へと政治的アイデンティティーが転換される際の心理的な抵抗や少数派民族からの反発があったことを認めつつも、これらは近代化の力で克服され、国民国家が着実に形成されていくと考えたのである。

たしかに、共和国以降のトルコでは近代的な国民意識をもつ国民の形成が進んできた。しかし一方、ルイスやベルケスが描いたナショナリズム像からは逸脱するようなナショナリズム的現象が共和国以降のトルコでたびたび姿を現してきた。このことは、彼らが西洋近代の経験をモデルに構築したナショナリズム像が、トルコ・ナショナリズムの全体像ではなく、その一部分を現しているにすぎないということを示すものである。

このような逸脱的なナショナリズム現象の例として、汎トルコ主義がある。この汎トルコ主義は、ムスタファ・ケマルがその放棄を正式に宣言したにもかかわらず、世界的なファシズム流行に刺激された第二次大戦前夜において、そしてまた工業化社会の歪みが拡大した1970年代に再び高揚した拡張主義的なイデオロギーである⁽²⁴⁾。また、クルド人のナショナリズム運動は、トルコ・ナショナリズムの現実のあり方を裏返したかたちで示すものとして興味深い。すなわち、共和国の公的なナショナリズム見解として継承されたギョカルプの思想は、トルコ人として教育を受けトルコ文化を享受する者がトルコ人であると定義し、したがって本来トルコ語を母語とせずトルコ的生活慣習を持たない人々もトルコ人として受け入れた。この意味において、共和国の公的なイデオロギーとしてのトルコ・ナショナリズムは寛容な思想であった⁽²⁵⁾。しかし実際にはトルコは国内にトルコ人とクルド人の対立を抱えている。そしてその原因は、トルコ・ナショナリズムが現実の政治の場面ではトルコ化の強制、トルコ以外のアイデンティティーの否定というかたちで政策化されてきたためであった。このような現実は、トルコ・ナショナリズムの多面性を示している。

近代国家のイデオロギーとしての側面とこれに矛盾する側面を併せ持つという、このようなナショナリズムのあり方が意味するのは、トルコにおける国民形成の難しさであろう。オスマン帝国時代の記憶も生々しい初期の共和国では、トルコ人としての意識を民族アイデンティティーのレベルにまで高め強化することが、新生の国家を内外に対して正統化するために必要であった。これに利用されたのが「トルコ民族の栄光」といった「神話」である⁽²⁶⁾。しかしこれはトルコ人の汎トルコ主義思想を煽り、またクルド人をはじめとする少数派からはトルコ化強制であるとして反発を買うなど、国家を解体させかねない事態を招く両刃の剣であった。トルコ人としてのアイデンティティーの確立のためには、ナショナリズムの公的解釈を血縁や文化の同質性を強調する排他的なナショナリズムで補完しなければならなかったという皮肉な事情が、今日にいたるトルコ・ナショナリズムの背景にあるのである。

国民国家の枠組みが相対化する時代を迎え、人々が国民としてどれほど確立しているかという問いにトルコも向きあわざるをえない時期を迎えていることは、本章の冒頭で既に述べたところである。共和国をナショナリズム研究の前提に置くルイスとベルケスは、帝国から共和国への過渡期に発生した国家への帰属意識の問題は、あつれきを生みながらも最終的には解決できた、あるいはされるべきであると考えた。しかし、現実のナショナリズムは、彼らが研究対象とした公的なナショナリズム見解とは矛盾する側面を持っている。では、トルコ・ナショナリズムが持つこのような性格の背景を理解し、トルコの国家としての性格を明らかにするには、どのようなアプローチが適切であろうか。これは、西洋の目がとらえたナショナリズム像のオルタナティブを用意し、より膨らみのあるナショナリズム像の構築を可能とするものでなければならないであろう。このような要請に応えたのは、次節で紹介する新井およびランドーを代表とする比較的新しい世代の研究者たちである。

新井の研究は、ルイスや、特にベルケスの研究を評価して継承しながら、近代化論的なアプローチへの批判の姿勢を明確に打ちだし、彼らとは異なる、いわばトルコ人の視座を提示するものである。したがって、ルイスおよびベルケスの研究とアプローチを比較することは興味深いであろう。またランドーの研究は、ナショナリズム研究という範疇でとらえられるかやや疑問は残るが⁽²⁷⁾、国民国家の枠組みと民族思想の空間的な広がりとの関係に着目しており、これまでとは異なるタイプの研究として注目すべきものである。

第3節 近代化論をこえて

1. 1970年代以降のトルコ近代史研究

新井に代表されるような、西洋中心主義から離れたアプローチが登場してきた背景となる条件としては、第1に1970年代に欧米の学界でおこった近代

化論批判がある。ベトナム戦争やカンボジア問題、成長の限界に関するローマ・クラブ報告といった一連の危機は、西洋近代の歴史的発展過程そのものへの疑問を提起し、西洋近代を至上的価値とする従来の近代化論の修正を迫った⁽²⁸⁾。また近代化論の見直しは、非西洋諸地域において価値観や前提条件が地域ごとにそれぞれ異なることへの認識を高めた。第2に、冒頭でも触れたような、既存の国民国家を正統化するイデオロギーとしてのナショナリズムへの不信と、これを破壊させるような別のナショナリズムの噴出という世界的な事態の変化がある。ヨーロッパにおける統合の動きとソ連邦の解体および再編成は、作用している力の向きは反対だが、既存の国家枠組みを相対化する動きであるという点で性格を同じくしている。これらの動きは、他の諸地域へもさまざまな影響を及ぼすと考えられる。

歴史研究者が採用するアプローチや発する問いのありようは、彼がおかれた社会的・文化的環境によって規定される部分が多い。世界的な現実の事態の変化とそれに伴うパラダイムの見直しは、西洋以外の諸地域の歴史を扱う欧米の研究者に、従来のアプローチが西洋中心的なものであったのではないかという自省を促した。これは西洋的な思考の訓練を受けて自国の歴史を研究する非西洋地域の研究者についても同様であった。

西洋中心主義の視座から離れ、トルコ人の視座に立とうとするトルコ近代史研究の新しい研究動向が生まれた背景には、以上のような世界的な状況の変化があったのである。さらに、研究の蓄積が進んで概説的・通史的な段階から個別的なテーマの分析へと研究が発展したことが、このようなパラダイムの見直しを現実的にした。すなわちテーマを限定して実証的な分析を試みることにより、文明論的な荒っぽい歴史の把握が否定され、事実により忠実な歴史構築の試みへと研究が深化したのである。

欧米語・邦語によるナショナリズム研究の分野でも、1970年代以降、トルコ史研究全体の深化を反映して、ナショナリズムそれ自体を対象とし、緻密な実証に基づく労作が発表されてきた。まずギョカルプ研究の分野では、従来イスラームや文化、歴史を中心に分析されることの多かった彼の思想を、

政治理論として分析したタハ・パルラ (Taha Parla) の研究がある⁽²⁹⁾。パルラによれば、共和国初期のケマル主義も、第二次世界大戦後に高揚した自由主義も、70年代の汎トルコ主義も、すべてギョカルプの思想にその原型をもっていた。パルラの問題意識は、共和国以降に現れた政治思想の潮流は、すべてギョカルプのコーポラティズム (corporatism) 思想の流れを汲むものであるから、現代トルコ政治を理解するためには政治思想としてギョカルプの思想をとらえなおさなければならない、というものである。

またナショナリズムの形成については、デヴィッド・クシュナー (David Kushner) が、青年トルコ人革命に先立つ約30年間のスルタン専制時代に刊行された出版物を材料にして、革命前のナショナリズムの発展を実証的に明らかにしている⁽³⁰⁾。クシュナーが序文で指摘するように、それまでの思想研究はギョカルプに関しては充実しているが、ギョカルプが活躍する以前のナショナリストたちについて関心が薄かった。クシュナーの研究は、ギョカルプに先行する彼らの思想を分析することによって、ギョカルプの思想の知的源流を明らかにしようというものである。

次節で紹介する新井とランドーの研究は、これまで主役としては扱われてこなかった、共和国とは別の国家をイメージした思想に注目し、オスマン帝国から共和国への移行という範囲を越えてナショナリズムの潮流をとらえようと試みるものである。彼らの研究の特徴は、単に実証レベルの向上だけでなく、その斬新なアプローチにあるのである。

2. 新井の研究

1980年ごろから精力的に発表されてきた新井の一連の論文⁽³¹⁾は、オスマン・トルコ人と亡命トルコ人とでは、自らを認識する歴史・政治的状況が異なっており、それゆえに彼らのナショナリズム思想が異なるものとなったという仮説をたて、複数のナショナリストの比較検討によってこれを実証しようというものである。新井は、オスマン帝国期のトルコ・ナショナリズム思

想について、従来の研究がギョカルブを偏重したためその全体像を把握できなかったと考えた。そして、それまで表層的な分析を受けるにとどまっていたナショナリスト・クラブの綱領や定期刊行物を綿密に分析しなおし、そこに表れたナショナリストたちの思想傾向を明らかにする作業を行なった。その結果、トルコ・ナショナリズムは単線ではなく、オスマン・トルコ人と亡命トルコ人の思想が複雑に絡みあって構成されていたことが実証されている。

新井は、まず、青年トルコ革命後初めて設立されたナショナリスト団体である「トルコ協会」(Türk Derneği)に特に注目し、機関誌『トルコ協会』の性格分析を行った⁽³²⁾。同協会は、亡命トルコ人のユスフ・アクチュラ(Yusuf Akcura)とオスマン・トルコ人の知識人の協力のもとに設立されたものである。新井は、同協会の声明文および綱領への補足文章を分析し、両者の間で同誌に期待するものがすでに設立の時点で異なっていたことを明らかにした。すなわち、オスマン・トルコ人が政治性を排除し文化的な組織をうたうのに対して、アクチュラは広大なトルコ人世界がヨーロッパ列強に脅かされていることに危機感をあらわにしているのである。

また新井は、オスマン語の簡略化を掲げるサロニカの『ゲンチ・カレムレル』(若いペン, *Genç Kalemler*)誌を検討し⁽³³⁾、同誌の担い手が青年トルコ人政府に近いオスマン・トルコ人の知識人であったこと、および同誌の主張する「新しい言葉」は、トルコ人を中核に帝国を再建するため、彼らのトルコ人意識を高め啓蒙する目的に供されるべきものであったことを明らかにした。

サロニカ陥落後、『ゲンチ・カレムレル』誌刊行メンバーはイスタンブルに移り、アクチュラをはじめとする亡命トルコ人ナショナリストとともに『テュルク・ユルドゥ』(トルコ人の母国, *Türk Yurdu*)誌の刊行に携わる。新井は、同誌について、刊行メンバーの構成がオスマン・トルコ人と亡命トルコ人が半数ずつであり、またロシア領内のトルコ系ブルジョワから財政援助を受けていたため、後者が強い発言権を持ち、主導権を握っていたことを明らかにした。新井によれば、同誌はオスマン・トルコ人と亡命トルコ人がそれぞれトルコ・ナショナリストとして自由に発言する最初の場であった。し

かし、両者は異なる傾向を持つことが執筆内容から明らかであった。ギョカルプをはじめとするオスマン・トルコ人は、ナショナリズムに目覚めた帝国内の諸民族を支配しつづけるためには、オスマン国家の中核となるトルコ人もナショナリズムを追求すべきであると主張した。これに対し、アクチュラをはじめとする亡命トルコ人は、もはや帝国の集権的維持は不可能であり、トルコ人はオスマン国家を超えたトルコ系諸民族の政治統合を目指すべきであると主張しているのである。

これまでトルコ・ナショナリズムは、オスマン主義や汎トルコ主義と対置される政治思想として典型的にとらえられることが一般的であった。これに対し、新井は以上のような作業から、トルコ・ナショナリズムが2つの異なる思想潮流から成っていたという結論を得た。すなわち、オスマン・トルコ人とロシアからの亡命トルコ人は、表向きは協調しつつも、それぞれのトルコ人としての立場の違いゆえに根本的には異なる思想を抱いていたのである。オスマン・トルコ人は、帝国支配者として帝国の維持を優先目標に掲げた。そのため彼らのナショナリズムは、帝国の維持のためには政治統合の中核になるトルコ人の意識を高めることが必要であるという文脈で理解されるべきものであった。他方、亡命トルコ人は、ロシア帝国の抑圧に苦しむ「同胞」を、オスマン・トルコ人との大同団結によって救出することを目指した点において、新しい国家枠組みを模索する思想として彼らのナショナリズムを構想したのである。

また新井は、ナショナリストはイスラーム主義者と対立する立場にあるという従来の類型的なとらえかたに疑問をもち、オスマン・トルコ人のナショナリストが中心になって刊行した『イスラーム評論』(*İslam Mecmuası*)誌をとりあげ、そのイスラーム論の分析を行なっている⁽³⁴⁾。その結果、彼らオスマン・トルコ人ナショナリストが要求した世俗化政策の本質は、イスラームの排除ではなく、イスラームを管理することによってこれを浄化し再活性化させようというものであったこと、そしてイスラーム本来の真実に沿った「近代化」を達成しようというものであったことが明らかにされた。オスマ

ン・トルコ人が目指したのは単なる西洋の模倣ではなく、西洋近代の本質を抽出することによって模索されるべきトルコ人独自の近代化であったわけである。このような結果に対して新井は、従来の「西欧志向の近代化主義」対「反西欧の（イスラーム）原理主義」という単純な枠組み設定は批判されるべきである⁽³⁵⁾としてこの論文を結んでいる。

以上のように新井の一連の研究は、トルコ・ナショナリズムが2つの潮流から成っていたことを明らかにし、オスマン・トルコ人のナショナリズムはトルコ・ナショナリズムのひとつのあり方であったこと、その本質は帝国維持でありオスマン主義と同根の思想であったことを明らかにした。さらにオスマン・トルコ人がめざした近代化の本質は、西洋の価値体系や発展プロセスの無批判なコピーではなかったことを確認している。オスマン帝国から共和国、伝統から近代という問題設定を離れ、一次史料の緻密な検討によってナショナリズムの全体像を描こうとする新井のアプローチは、西洋近代を至上価値とする単線の発展モデルを離れ、トルコ人の視座を尊重して歴史を構築しようとするものといえよう。

3. ランドーの研究

ヤーコブ・ランドーの『トルコにおける汎トルコ主義：民族拡張主義の研究』⁽³⁶⁾は、イギリスの外交文書やナショナリスト・クラブの刊行物を中心とする膨大な一次史料を駆使して、1980年の軍事クーデターまで視野に入しながらトルコにおける汎トルコ主義思想の変遷を描きだした労作である。ランドーによれば、民族拡張主義 (irredentism) とは、国外の同胞 (伝統や言語、人種の出自を同じくする人々) への関心がイデオロギーあるいは組織結成のかたちで表現されたものであり、その要求は、穏健な場合は彼らの保護、急進的な場合には彼らの居住地の自国領への編入として現れる。ランドーの関心は、この民族拡張主義と既存の国家枠組みとの関係にあり、本書はそのケース・スタディとしてトルコにおける汎トルコ主義をとりあげたものである。

序文によれば本書の目的は、汎トルコ主義について、トルコにおけるナショナリズムの形成や政治にそれが果たした役割について述べることより、むしろその民族拡張主義的な性格を他の汎イデオロギーとの比較において明らかにすることにある⁽³⁷⁾。ランドーは、ナショナリズムを既存の国家を正統化するイデオロギーととらえ、国家枠組みを超えた連帯をうたう汎イデオロギーとは異なる次元の概念であると考えているようである。それにもかかわらず本章で本書をとりあげるのは、汎トルコ主義がトルコ人の政治的・文化的連帯をめざす思想あるいは運動とされる以上、これをトルコ・ナショナリズムのひとつの表現として解釈し、ルイス、ベルケス、新井の研究とアプローチの比較が可能ではないかと考えたためである。本章では、ランドーが汎トルコ主義を上記のように彼が規定したナショナリズムとどのように関係づけているかを見てみたい。

ランドーによれば、オスマン帝国末期のトルコ思想は、トルコ人を中核にした帝国再建をめざすトルコ主義と、中央アジアに散らばるトルコ系の人々とオスマン・トルコ人の大同団結を唱える汎トルコ主義の2つの潮流に分かれていた。トルコ・ナショナリズムは、当初前者のトルコ主義のかたちをとって現れたが、第一次大戦で対ロシア戦が開始されると徐々に後者の汎トルコ主義的な色彩を強めていくことになった⁽³⁸⁾。

ところでランドーは、『トルコ協会』誌や『テュルク・ユルドゥ』(トルコ人の母国)誌といった定期刊行物の分析から、ズイヤ・ギョカルプやユスフ・アクチュラなど当時のトルコ・ナショナリストはおしなべて汎トルコ主義者であったとしている。これは、新井によるナショナリストの2分類と比較すれば、かなり粗い分析のようにも思われよう。ランドーは、オスマン帝国あるいは共和国の外のトルコ人への関心をもって汎トルコ主義的としているのであるが、これは彼の問題関心が、思想あるいは運動の対象の広がりといったものにあるためと考えられる。では、これらのナショナリストに担われた汎トルコ主義思想は、共和国のケマル主義体制下の新しいナショナリズムとどのように関係にあったのだろうか。

ランドーによれば、大戦後オスマン帝国が解体し共和国が誕生すると、この新しい領域国家に基づくナショナリズムの形成が進められた。大戦後の不安定な国際環境を生き抜くためには近代国家として早急に確立することが必要であったが、そのために打ちだされたのがケマル主義と呼ばれる6原則である。ケマル主義は、新しい領域国家とそれをとりまく国際環境を受け入れ、体制維持に利用できるものは積極的に吸収しようという、きわめて現実的なイデオロギーであった。ケマル主義のひとつに「ナショナリズム」(Milliyetçilik)は入れられたが、その性格は、新しい国家領域をトルコの固有の領土とし、拡張主義の放棄をうたう、愛国主義(パトリオティズム)的なものであった。ケマル主義の現実主義を反映して、この新しいナショナリズムは、帝国末期に高揚した汎トルコ主義の拡張主義的な側面を否定する一方、その文化的な要素を吸収しながらナショナリズムとしての体裁を整えていった⁽³⁹⁾。共和国初期には、汎トルコ主義は国家によって一面では否定され別一面では受け入れられることになったのである。

さて、その後の汎トルコ主義は、国内外の環境に大きく左右されながら変遷をたどる。第二次世界大戦前夜には、ナチス・ドイツが中立のトルコを自陣営に引き込むため、トルコ国内でソ連領下のトルコ系の人々を救済せよとのキャンペーンを張って汎トルコ主義者に訴えたが、これはトルコにおける汎トルコ主義に人種主義的な傾向を与えることになった。また大戦後、ソ連・東欧諸国・中国で共産主義体制が確立すると、汎トルコ主義はこれらの国々に住むトルコ系の人々の救出を呼び、その主張は反共産主義の色彩を強めることになった。これは、対ソ連関係の悪化をおそれる政府当局による汎トルコ主義の組織活動の全面禁止という結果を招いた。しかし、リベラルな1961年憲法の成立により、汎トルコ主義は、それまでの文化面を中心とする宣伝活動から、政党の結成による議会政治への参加へと政治化していくことになるのである。

以上、ランドーの叙述に従いながら、ナショナリズムとの関係を軸に汎トルコ主義の変遷を簡単に紹介してきた。本書においてナショナリズムは、既

存の国家枠組みを正統化するイデオロギーとされており、オスマン主義的なトルコ主義とケマル主義体制のトルコ主義がこれにあたるわけである。本書でこれらのナショナリズムは、汎トルコ主義との関係のなかで登場するにすぎない。しかし、本書における汎トルコ主義をナショナリズムのひとつの表現として広くとらえるならば、ランドーのアプローチは新井と同じく、多面的なナショナリズム像を構築する試みとして評価できるのではないだろうか。すなわち、新井がトルコ人としての立場に注目してオスマン帝国内に並存した2つのトルコ・ナショナリズムを抽出したとすれば、ランドーは既存の国家との関係を基準にして、トルコ主義と汎トルコ主義というかたちで2つのナショナリズム的イデオロギーを提示したのである。新井とランドーは分析の切り口は異なるものの、ナショナリズムを複眼的にとらえようとする点で共通しているといえる。

おわりに

ルイスとベルケスを出発点とする初期のトルコ・ナショナリズム研究は、「西洋のインパクトで破壊された伝統的構造にかわる近代的構造をつくる近代化改革」という当時の近代史研究の視点に影響されて、ナショナリズムを近代国民国家としての共和国に結びつけたものとしてとらえてきた。そのためトルコ・ナショナリズムという舞台は、オスマン・トルコ人と「近代西洋」の二人芝居（一方的な優位に立つ「近代西洋」とこれに追いつこうとするオスマン・トルコ人）になり、そのなかで亡命トルコ人や帝国内の非トルコ人が登場するのは重要ではあるがごく限られた役割（トルコ人意識形成と、ナショナリズム概念の脱宗教化）を演ずるときだけだった。

共和国という既存の国家枠組みをいったん離れてオスマン末期のトルコ・ナショナリズムを振り返ったとき、新井は共和国に収斂した思想ばかりでなく、帝国からさらに中央アジアへ拡散していくような思想もオスマン帝国内

に並存していたことを明らかにした。これら2つのトルコ思想の方向性の違いは、担い手であるオスマン・トルコ人と亡命トルコ人の、それぞれが属する国家のなかでの「トルコ人」としての立場の違いから生まれたものであった。オスマン・トルコ人は所与の国家を満たすネーションを「発見」あるいは創出しなければならず、亡命トルコ人は所与のネーションを自立させるための国家枠組みを獲得しなければならなかったのである。また、ランドーは、国家枠組みを超えた連帯をうたう汎トルコ主義的思想潮流を分析することによって、既存の国家枠組みを正統化するイデオロギーとしてのナショナリズムと汎イデオロギーの関係という興味深い枠組みをナショナリズム研究の場に提示した。

以上に簡単ながらまとめて見てきた2人の研究に共通するのは、トルコ・ナショナリズムを、現在のトルコ共和国に収斂する思想に限定せず、既存の国家枠組みからいったん自由になってこれをとらえようというアプローチである。トルコにおける現実のナショナリズムは、公的な解釈が排他的な文化的トルコ主義で補完されるという多面性を持っている。新井とランドーの実証的な研究は、ルイスとベルケスが西洋の目でとらえた一面的なナショナリズム像に対して、多面的なナショナリズム像を構築する試みとして評価されよう。

念のために確認するなら、新井およびランドーの研究を既存の国家枠組みを否定する政治的な文脈で理解するのは誤りである。ナショナリズムがシンボルの操作によって「つくられうる」可変的なものであり、絶対的な存在ではありえない以上、そのような姿勢は新たなナショナリズム問題を煽るものでしかないだろう。ナショナリズムが形成された経緯を、既存の国家枠組みからいったん離れて歴史的背景のなかで正しく理解し、その上で再びナショナリズムと国家との関係の考察に戻ること。これがナショナリズムをめぐる紛争の解決の第一歩と考える。その意味で新井およびランドーの研究は、現在のトルコが抱える、あるいは将来抱えるであろう国家としてのあり方の問題を考える上で、貴重な示唆を与えてくれると思われる。

今後、トルコ・ナショナリズム研究をさらに発展させるために、第1に、共和国以降、亡命トルコ人のナショナリズム思想がどのように変化したのか、あるいは変化しなかったのかを明らかにすることがあげられる。また第2に、青年トルコ人として反専制の共闘体制をとった時期のアラブ人やアルバニア人とオスマン・トルコ人の関係に注目することがあげられよう。また、トルコ・ナショナリズムの形成について説得力のある議論を行なうためには、オスマン帝国内における「支配者」たるトルコ人の政治・社会・経済的地位が非トルコ人と比較してどのようであったか、さらにこれに関連して、ミッレトは実際にどのように機能したのかということも明らかにする必要もある。現在までのミッレト研究は理念的な理解の段階をまだ十分に越えていないようである⁽⁴⁰⁾。実証的な研究によって、かつての「自治」の実態を知り、オスマン国家の政治支配の性格を明らかにすることが、ナショナリズムについて議論を展開するための不可欠の土台であろう。

[注] —————

- (1) Lewis, Bernard, *The Emergence of Modern Turkey*, ロンドン, Oxford University Press, 1961年(第2版, 1968年)。
- (2) 同上書, 486ページ。
- (3) 同上書, 483~485ページ。
- (4) 同上書, 329~333ページ。
- (5) 同上書, 333~340ページ。
- (6) 同上書, 340~342ページ。
- (7) 1878年に議会在閉鎖され、憲法が停止されてアブドゥル・ハミト2世の専制政治が開始されると、新オスマン人たちは追放・懐柔され、勢力を失った。
- (8) Lewis, 前掲書, 218~219ページ。
- (9) 同上書, 344ページ。
- (10) 同上書, 345~349ページ。
- (11) 同上書, 349~351ページ。
- (12) 同上書, 352ページ。
- (13) 同上書, 3ページ。
- (14) Berkes, Niyazi, *The Development of Secularism in Turkey*, モントリオール, McGill University Press, 1964年。

- (15) 同上書, 329~333ページ。
- (16) 同上書, 345, 352~356, 364~366ページ。
- (17) 同上書, 345, 359~366ページ。
- (18) 古典的研究として, Heyd, Uriel, *Foundations of Turkish Nationalism : The Life and Teachings of Ziya Gökalp : 1876-1924*, ロンドン, Luzac, 1950年, がある。
- (19) Berkes, Niyazi 編訳, *Turkish Nationalism and Western Civilization*, ニューヨーク, Columbia University Press, 1959年。
- (20) Lewis, 前掲書, 485ページ。
- (21) 近代化論的な歴史へのアプローチについては, Cohen, Paul A., *Discovering History in China*, ニューヨーク, Columbia University Press, 1984年 (P・A・コーエン, 佐藤愼一訳『知の帝国主義——オリエンタリズムと中国像』平凡社, 1988年)を参照した。本書では, 近代化論の一側面である, 社会の発展を「伝統的段階」と「近代的段階」に二分する発想に批判を加えている。このような側面への反省に基づく最近の近代論の展開については, 以下を参照されたい。篠原一『ヨーロッパの政治: 歴史政治学試論』東京大学出版会, 1986年, 第1章「理論的枠組み」第2節「政治発展の理論」。
- (22) コーエン, 同上書, 126ページ。
- (23) Lewis, 前掲書, 357ページ。
- (24) 松谷浩尚『現代トルコの政治と外交』勁草書房, 1987年, 145~146, 313~314ページ。
- (25) Berkes 編訳, *Turkish Nationalism……*, 134~138ページ。
- (26) 歴史協会・言語協会が設立され, トルコ史編纂やトルコ語浄化(アラビア語・ペルシア語起源の単語を廃して古代トルコ語の単語を復活させる)が行なわれた。以下を参照。Lewis, 前掲書, 358~360ページ/Shaw, S.J.; E.K. Shaw, *History of the Ottoman Empire and Modern Turkey*, 第2巻, ロンドン, Cambridge University Press, 1977, 376ページ。
- (27) これについては後述する。
- (28) コーエン, 前掲書, 15ページ。
- (29) Parla, Taha, *The Social and Political Thought of Ziya Gökalp : 1876-1924*, ライデン, E.J. Brill, 1985年。
- (30) Kushner, David, *The Rise of Turkish Nationalism : 1876-1908*, ロンドン, Frank Cass, 1977年。
- (31) 最近その集大成が刊行された。Arai, Masami, *Turkish Nationalism in the Young Turk Era*, ライデン, E.J. Brill, 1992年。
- (32) 新井政美「『トルコ協会』の設立とその活動—Turk Yurdu 創刊前史—」(『東洋学報』65, 1984年3月)。

- (33) 新井政美 「『ゲンチ・カレムレル』と青年トルコ人—ナショナリズム研究の観点から—」 (『史学雑誌』 93-4, 1984年4月)。
- (34) 新井政美 「オスマン帝国におけるイスラム改革主義の展開—Islam Mecmuasiを中心に—」 (『東洋史研究』 45-3, 1986年12月)。
- (35) 同上書, 21~22ページ。
- (36) Landau, Jacob M., *Pan-Turkism in Turkey : A Study of Irredentism*, ロンドン, C. Hurst, 1981年。
- (37) 同上書, 4ページ。
- (38) 同上書, 28~55ページ。
- (39) 同上書, 72~73ページ。
- (40) ミットトに関して, 最近発表された実証的な研究としては, 以下がある。
Braude, Benjamin ; Bernard Lewis 編, *Christians and Jews in the Ottoman Empire*, Vol.1 (the Central Lands), ニューヨーク, Holmes & Mcier Publishers, 1982年。